
箱根婚前旅行顛末記

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱根婚前旅行顛末記

【Nコード】

N4895B

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

母親が旅行先で倒れた！佐藤は、コクーン発表会場で起こった殺人事件を気にしながらも、千葉刑事の好意に甘え、箱根へと赴く。そこで待ち受けていた驚愕の事態とは。

(前書き)

2002年4月公開のコナン映画「ベイカー街の亡霊」のサブストーリーです。

声優の高木渉さんが「どうして映画に佐藤刑事と高木刑事は出ないんですか」とインタビューで聞かれた時「佐藤さんと箱根に婚前旅行に行ってたんですよ」答えた、と言う話を某BBSで聞き、まして、この話を思いつきました。

一課の電話が鳴った。

「なに！コクーンの発表会場で殺人事件！」

白鳥の声に、一課に残って仕事をしていた全員が緊張する。別の電話が鳴る。

「え？！佐藤さんのお母さんが！？」

ちよつと、もつと詳しく！！」

呆然と切れてしまった、受話器を見つめる千葉に佐藤が、慌てて駆け寄る。

「どうしたの？お母さんになにか？」

無理やり、感情を押さえつけた、平静すぎる声。

「いえ、どうも耳の遠い方らしくてはつきりしないんです。とにかく佐藤さんのお母さんが、急に具合が悪くなって救急車で、近くの病院に運ばれたとか」

「母は、今日、近所の老人会の御世話係で、

箱根の旅行にいっしょに行ってたのよ。

じゃ、病院は、旅館に聞けば教えてもらえるわね。

後で、電話してどんな様子か、聞くわ」

「佐藤さん、すぐ行かなきゃ」

千葉が立ち上がって佐藤をきつい眼差しで見つめる。

「何言ってるの、事件なのよ。」

高木君は、友達の結婚式で今日明日、お休みだし、

千葉君だって、明日休みなんですよ。

私が抜けるわけには・・・」

千葉が、企むような笑顔を見せた。

「実はね、僕、明日の休みは、

故郷で無理やり見合くいさせられるんですよ。

佐藤さんが、僕の代わりに休んでくれると、

断る理由ができてすごく助かるんですが」

目暮警部が言った。

「さあ、白鳥君、千葉君行くぞ!」

「目暮警部!」

佐藤の声に振り向かず、目暮は足早に部屋を出た。

千葉は振り向きざま、ウインクして言った。

「御土産は、温泉饅頭でいいですからね」

佐藤は、病室のドアを乱暴に開けた。

間髪いれず、怒鳴り声。

「美和子、ここは病院よ。もっと静かにしなさい!」

佐藤は、ベットに座った母のいつもとかわらぬ元気な姿を見て、安堵のあまり足から力が抜けて行くのを感じた。

その佐藤の体を支える力強い腕。

「え? 高木君? どうして?」

腕の持ち主を見た佐藤は絶句した。

「結婚式の披露宴に出てたら、急に外が騒がしくなって、

様子を見に出たら、佐藤さんのお母さんが苦しんでおられたんです。それで、病院にいっしょに付き添ったんですよ」

「もう、それなら、どうして私に電話を直接くれなかったの!」

佐藤は急に腹が立ってきた。

「いくら宿に電話しても、お母さんと一緒の人は、

お婆ちゃんばかりで、全然様子がわからないし、

すごく・・・すごく心配したんだから」

「す、すみません」

「美和子、まず、お礼が先でしょう。」

高木さんは、苦しみ私に今まで、ずっとついてくれたんだから」

「何よ! 元気そうじゃないの!」

高木は、二人の間に入って言った。

「お医者さんによると、尿管結石による腹痛だったそうで。」

石はさつき出て、痛みも取れましたし、残ってる石もないので、一晩入院したら明日には、帰れるそうです」

「で、美和子、仕事は？」

「休みを無理やりもらったわよ！」

「そりゃ良かった。じゃあ、今晚お婆ちゃん達の面倒見てちょうだい。」

私のせいで、せっかくの昼食台無しにしてみましたし、せめてカラオケ大会だけでもやってあげなくちゃ」

佐藤はその場から逃げ出したかった。

背後から、高木が言う。

「佐藤さん、僕も、手伝いますよ」

佐藤は、母の頼みを聞かざるをえなくなった。

そして、今、佐藤は高木を恨んでいた。

“手伝うなんていってくれなきゃ、

事件があるから、って逃げられたのに”

お婆ちゃんパワーによる宴会はすごかった。

歌い、飲み、喰う。

「ほれ、美和子ちゃん、だったよね。天城越え、いっしょに歌おうよ」

“ええい、仕方ない。お母さんが世話になっちゃったし”

「ほら、一杯景気付けに飲んで」

ビールの大ジョッキが押し付けられる。

「佐藤美和子！行きます！！」

“もう、どうにでもなれ！！”

一時間後。

「ほら、高木君、ビール無いわよ。どンドン頼んでよ、気がきかない」

「美和子ちゃん、ほれ、あんたの頼んだ歌、かかってるよ」

「いやあ、いいノリだね。さすが佐藤さんの娘さんだ」

佐藤を中心に盛り上がる宴会の中、

高木はコマネズミの様に働いていた。

翌朝。

高木は、部屋の隅で、目を覚ました。

座ったまま眠ってしまったようだ。

目の前は、まさしく死屍累々。

折り重なるようにして、お婆ちゃんずと、佐藤が眠っていた。

まだみんな目を覚ましそうに無い。

高木は眠気覚ましに風呂に行く事にした。

風呂から上がると、やはり風呂上りの風情の佐藤に出会った。

「あれ、まだ眠っていたんじゃあ」

「たぶん、高木君のすぐ後、目が覚めたんだと思うわ。」

昨日はごめんなさいね。高木君ばかりに働かせてしまった」

心底すまなそうな佐藤は、いつもと違った魅力があった。

本庁と違って話し掛ける高木を邪魔しようとする者はいない。

朝風呂の後の、やや上気した佐藤の美しさを、

何か気のきいた、言葉で表現したかった。

「佐、佐藤さん・・・」

「やあ、君達は、米花町老人会の、ツアーコンダクターさん達だね」

いきなり見知らぬ男が、二人に話し掛けた。

いかにも会社のやり手の重役タイプである。

名刺を差し出しながら言う。

「申し訳ない。突然話し掛けて。」

昨日、高木さん、だったね、

君の宴会の時の働きぶりを見ていてね、

ぜひ我が、杯戸観光のツアーコンダクターに欲しいと思ったんだよ

それと、佐藤さん、だったよね。

仕事を忘れて、宴会に夢中になるのはいただけなかったが、お客さんを楽しませるパワーはすごかった。

高木君と佐藤さん、ペアで、ツアコンしたら、きつといいコンビになると思うんだ。

うちは、いいツアコンが不足していて、どうだい？」

「い、いいえ、僕は今の・・会社が気にいってるもんで」

「そうかい、まあ、気が向いたら、また電話しておくれ。佐藤さんもね」

男は去った。

佐藤は、クスリと笑った。

「高木君、懲戒免職食らっても職には、困らないわね。

毛利探偵事務所助手に、ツアコンか」

高木は、別のことを考えていた。

“ いいコンビ、赤の他人がそう思ってくれた。

今まで、なんだか、佐藤さんに僕はつりあわないかも、なんて思ってたけど、そうじゃないよな。

よし、自信がついたぞ！

そうだ、このまま、言ってみようか。

人生という旅で、二人でツアコンしてみませんか、

いや、えっと、二人で旅を、いいコンビで、ええと”

佐藤が大声をあげた。

「いっけない！ 千葉君に温泉饅頭頼まれてたんだ。

忘れないうちに、買っておかなくちゃ。じゃ、高木君、お先に」

佐藤の後姿を、高木は呆然と見送った。

“ 千葉、何で温泉饅頭なんか頼むんだよ”

一両日後。

高木、佐藤両名の、みやげ物の包装紙が、同じ旅館の物である、と気づいた刑事達に、高木は、鬼のように厳しい尋問を受けたので

あつた。

(おしまい)

(後書き)

私としては箱根に温泉饅頭が売っているか?というのがとても気になるります。

箱根・・・正月の駅伝でしか見たことのない私にとっては未知なる場所です(^^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4895b/>

箱根婚前旅行顛末記

2010年11月20日15時29分発行